HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本聖公会の八王子復活教会と仙台基督教会における戦災で残った基礎等利用での設計手法 ： 建築家元田稔と教会建築
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 34, 27-32
Issue Date	1999-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46605
Type	journal article
File Information	34_27-32.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

日本聖公会の八王子復活教会と仙台基督教会における戦災で残った基礎等利用での設計手法
――建築家元田稔と教会建築――

川島洋一

はじめに

本研究[註1]は大正時代から昭和六十二年まで建築活動を展開したキリスト教信者で建築家でもあった「故元田稔」について、残された建築作品中五十数棟という多くの教会建築を設計した活動経過に注目し、その設計手法と人物像について考察する事が目的である。

本稿では太平洋戦争で基礎等を残して焼失した会堂建築復興として、元田が昭和三十年代に関与した「日本聖公会（以下聖公会略）八王子復活教会」を対象とし、同様な変遷をした既報「同仙台基督教会[註2]」の教会建築と比較しながら、その設計手法の特徴について考察する。

1　聖公会八王子復活教会の伝道活動と教会建築[註3]

1・1　伝道活動

［初期伝道と教会成立］　明治初期多摩郡の中心地であった八王子では同十一年日本基督公会、カトリック教会同十六年には正教会等五派の講義所が設置されていた。八王子復活教会の講義所は同四十一年に設置、同四十三年日曜学校開校、教役者館完成、五日市町伝道等発展し、大正初期には八王子幼児園（同八年幼稚園）にも関与した。同四年には八王子復活教会と改称して准教会組織認可の教会となり同七年自給を目指した。この頃元田の父作之進は二度当教会を訪ねていた。この間講義所は移転を繰り返し同六年から教会建築に取り組み、昭和二年頃鉄筋コンクリート造の初期会堂が完成した。しか

し戦時中に宗教活動も制限を受け、宗教団体法（同十六年）により聖公会も日本基督教団に所属して単立教会とり、同二十年八月の八王子空襲により初期会堂は焼失した。

［戦後の伝道］ 戦後法案廃止で現名称にもどり会堂復興の機会を待った。戦後すぐにバラックの仮会堂を建て（翌年増築）、幼稚園園舎兼会堂を昭和二十五年に建築し（前会堂）、その後初期会堂の復興に向けて動き出し、元田稔により計画案が練られて同三十八年に現会堂が完成した。

1・2　教会建築の変遷

［講義所］ 明治より信徒宅、借家等を使用し、大正九～昭和初期にかけては木造平家建ての会堂であったと推定。

［初期会堂］ 講義所の固定化が急務であり大正六年以降具体的に検討され「未だ会堂を有せず（中略）多額の家賃をミッションより支払願（中略）大正十二年四月（伝道開始満十五年）を期し五カ年計画似て会堂建築を企て」として進展。又「会堂建築の為四、三〇〇円を得たるを以て適当な地として建設の計画あれど、資金充分あらざれば」との現状報告があり、更に「土地購入：今回ライフスナイダー博士の人力に依り、現幼稚園所在地なる二〇六坪の地所購入（中略）近き将来に煉瓦造の会堂を設立してこのニネベの地にも似たる八王子聖化せんこそ吾等の理想なり」「現在の教会及び幼稚園の敷地は、大正九年ライフスナイダー師の尽力によって購入決定された」との事で現在地が与えられた。教会建築の形態は「十字架の形をした教会」「鉄筋の教会を建て（中略）建物の形も教会である事を示すために十字架の形にした。第二次大戦で（中略）残ったものはこの鉄筋の教会側面だけ（中略）焼け野原にはっきりと十字の印を残した」との記録で、昭和2年頃建設された初期会堂は鉄筋コンクリート造平家建平面形はラテンクロスで前面両側に凸部分あった。断面は十字交差部分上部吹抜で明かり窓を設置、外壁交差部分三方に切妻屋根、縦長窓。そして「教会、牧師館、会館はすべて立派」で三棟が敷地内にあったと推察する。

［仮会堂］ 同二十年八月八王子空爆により初期会堂は基礎と側面のコンクリート壁が残り「天井が落ち（中略）

罹災の日から三日目に望月という少尉がトラックに木材を積んで来てくれて一日でバラックを建てくれた」また「小さなトタン屋根の掘っ立て小屋」との記録により復興は出来ず、同二十一年には中学校車庫を移設し六畳間とし、また「アメリカに頼らないで会堂の復興に着手（中略）六畳を礼拝の場にし」との記録から仮会堂として使用。

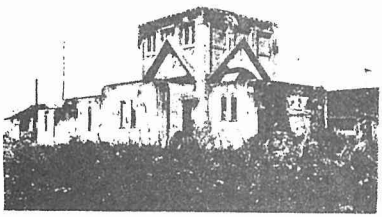
［前会堂（図1）］ 会堂復興では「教会が先か、幼稚園が先か（中略）幼稚園兼教会が設計されました」の記録があり、同二十五年一月には「鹿島組を訪ねて、会堂の建築は幼稚園を先に着手することに変更するやも」と具体的に進展し、三月「主教に会い八王子の教会の復興につき話しバット氏にも紹介され五十四万円はいつでも渡すから」との事で、園舎工事に入り上棟式後完成し、園児募集を実施して前会堂として出発した。同二十九年には幼稚園園舎を増築した。建物は木造平家切妻屋根で、内部は木造梁組の遊戯室とステージ（講壇兼用）保育室、玄関等が置かれた

［現会堂（図1）］ 復興には困難があり、同二十三年「ホーリネスの金井氏が十万円の寄付を兼ねて米国から莫大な寄付をもらおうとしている」との資金不足を克服して、園舎兼会堂を使用しながら初期会堂復興へ進み、「同三十八年五月十九日初期会堂がもとの形に再建され献堂式が行われた」との事で、元田設計による初期会堂外観と内部修復が行われた。落成時には毎日新聞記事となり「聖公会八王子復活教会が落成（中略）礼拝堂二〇〇m^2、総工費三〇〇万で同教会にゆかりの深い英国聖公会のR・T・ハンマー氏の呼び掛けで復興二五〇万円が英国から寄付」又「新しく屋根がのせられ昔と違った色に塗り替え」との事であった。現会堂は壁式構造平家切妻屋根、形態は初期会堂の側壁をそのまま使用し、平面形は同じであるが外観の交差部屋根上の十字架や玄関棟意匠が異なり、また内部では三角形断面の天井とそれを支える木造斜梁、正面台形状の出窓等は元田のデザインであったと考えられる。

■戦災で焼失した教会建築の復興と元田稔の設計手法〔図(1)(2)〕

（1）前教会建築外観形態を再現したデザイン

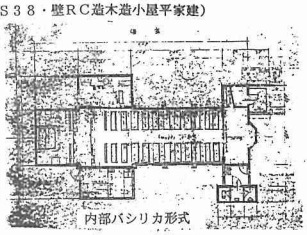
日本聖公会八王子復活教会



初期会堂（S初期・壁RC造木造小屋平家建）

現会堂（S38・壁RC造木造小屋平家建）

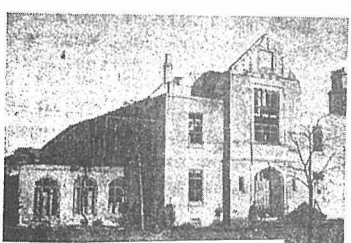
八王子復活教会現会堂(S38)外観正面妻側の祭上配置の置塔試案図



内部バシリカ形式

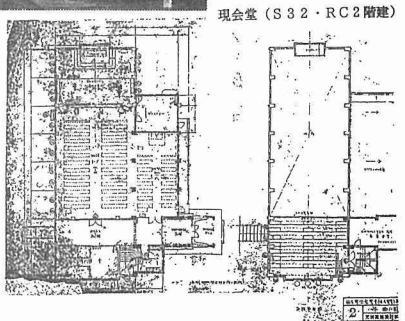
［独立塔の形態］

（2）前教会建築外観・平面形態と異なるデザイン　日本聖公会仙台基督教会



前会堂（S7・RC2階建）

現会堂（S32・RC2階建）



現会堂　仙台聖公会聖堂（准大聖堂）新築工事設計図
平立面図：元田建築設計事務所
1956（S31）年12月・1957（S32）年02月

3　復興二棟の特徴と元田稔の設計手法について（図1・2）

3・1　復興建築二棟の特徴

八王子復活教会（昭和三十八）と既報仙台基督教会（同三十二）での特徴は、前者は罹災以前形態に、後者では制約されないで新築的であった点。第二は「塔」の存在で、八王子復活教会では交差部方形屋根棟に置塔とし十字架を設置、仙台教会では独立塔でこの違いも特徴といえる。第三には礼拝室三角形断面天井の斜梁、玄関壁天井の細い木小梁の使用は二棟に共通した手法であり特徴と言える。

3・2　復興建築2棟での設計手法

平面では旧形態維持と新形態の提案という手法を用いこの異なる設計手法は各教会の要望があったと考えられ特に仙台教会では戦後処理としての区画整理等で旧位置では不都合であった事から、恐らく新築工事として捉えての設計であり、八王子教会では旧形態重視での改修工事的手法となった。「塔」形態では、仙台教会での教会位置を明確にする高い独立塔の採用であったが、八王子では設計段階では正面ペジメント棟上に置塔がデザインされていた。しかし実施では十字クロス方形屋根棟上に小さな置塔で控え目な十字架塔の表現を示している。

元田の意図するデザインは八王子での計画時前面置塔形態であり、控え目であっても独立的な塔としたかったと考えるならば、両デザインは「塔」に固執する姿勢のあらわれと言える。外壁や内部構成では、同三十年代の建築技術と材料による構成で、両教会共に外壁モルタル仕上げ屋根は金属板葺、又内部では天井を高くする為に三角形断面の屋根をギリギリまで持ち上げ、斜梁を意匠的に用いる点は元田の手法での特徴である。

おわりに

元田が関与した罹災後復興された二棟での教会建築としての設計手法を明らかにしたが、改修と新築そして「塔」表現の差異について考察した。特に八王子では、外壁に制約され、また高い十字交差部分の空間処理と言うデザインが要求され、既報[註1]の教会建築では見られない形態での設計であった。しかし修復工事であっても、設計

者としての個性をどこかに表現したいとの願望が「塔」の演出になったと推察できる。

註

（註1）93～98年度日本建築学会大会梗概集及北海道基督教学会基督教（第30、31）で発表

（註2）同基督教学第33号参照（98'）

（註3）「日本聖公会八王子復活教会史資料（S56）」「昭和期回想の八王子復活教会（S63）」等参照